



段ボールで顔を覆った俳優が躍動する「ごめん、まだ、準備中。」のワンシーン=名古屋市名東区のうりんこ劇場で

スケッチ

劇団うりんこ「ごめん、まだ、準備中。」

劇団うりんこ（名古屋市の新作「ごめん、まだ、準備中。」は、中高生が日記に書き付けた「声にならない声」から生まれた作品。「自分らしく生きたい。でも自分らしさって？かといって周りから浮いちゃうのは嫌だし…」。誰もが一度は感じたことのある思いをそのまま乗せたような舞台は、厳しさをはらみつつも温かく、肯定感にあふれていた。（5月12日、名古屋・うりんこ劇場）

看板俳優の遅刻で舞台の幕が開かず、若手劇団員のシユウスケ（山内周祐）、エリ（高島絵里）、ユウキ（宮腰裕貴）は1時間場を

厳しくもあふれる肯定感

つなぐように指示される。3人の声は出なくなり、代わりに劇場のスピーカーから言葉が流れてくる。それは彼らが思春期の頃、誰にも言えなかった思いで…。

声をなくした俳優たちは段ボールで顔をすっぽり覆い、「個」が消えた状態。スピーカーからは、うりんこがつてを頼りに集めた中高生の日記に刻まれた言葉が発せられては消えていく。サボりたい、うまくいかない、仕方ないと自己正当化する。やるせない思いがただ提示されていく。多くの人はおそろく「正しく生きたい。頑張りたい」と思っている。そうできなくて自己嫌悪に陥りがちだが、

実は他人も同じなのだ。「人ってそんなもん。それでもいいんだ」と思ったら、大体の悩みは解決する。

舞台にはたくさんの段ボールが積み上げられている。終盤、日記の声に合わせて代わる代わる明かりがともる演出で、これは私たち一人一人なのだと思付く。一見、他と同じでも、見えない内面は違うのだと。

そう悟った時、3人の俳優は声を取り戻して熱狂する。が、折しも看板俳優が到着。さっさと舞台を明け渡せと冷や水を浴びせられる。一生懸命やったことが必ずしも他人に通じるとは限らない。人生は厳しいが、これも知っておけば結構平気であられる。

（小原健太）